高校生の問題行動とその心理社会的要因
—信頼感並びに親の態度との関係から—

D98-4565　中山薫　（指導教官　朝倉隆司）

Ⅰ．目的

本研究の目的は、高校生の問題行動が信頼感の高低によってどう異なるか、また、どのような親の態度が問題行動と関連しているのかを検討することである。

Ⅱ．研究方法

石川県の公立高校２校の 1,2 年生　918 名（男子 440 名、女子 478 名）を対象に、無記名の質問紙調査を行った。調査項目は、高校生の信頼感（信頼感尺度, 天貝）、信頼感を形成する経験要因、問題行動（29 項目）、親の態度、高校生の問題行動に対する考えなどである。分析方法は、SPSS10.0J を用い単純集計、クロス集計、χ^2検定、ｔ検定を行った。信頼感、問題行動、信頼感の形成要因、親の態度を基本的属性で分析したのち、問題行動を行っている者といない者で信頼感、親の態度を比較した。信頼感の下位尺度は、それぞれの傾向が強いほど得点は高くなるように加算した。

Ⅲ．主な結果と考察

１）信頼感と問題行動

信頼感は「不信」、「自分への信頼」、「他人への信頼」の３つの下位尺度から構成されており、それらと 28 項目の問題行動との関連を検討した。問題行動を行っている者といない者について平均値を比較した結果、問題行動と最も多くの関連がみられたのは「不信」であり、男子は９項目、女子は８項目であった。とりわけ、男子においてシンナーなどを使用したことがある者とない者（あり＝28.00、なし＝21.94）や先生に暴力で反抗したことがある者とない者の平均値に大きな差が見られた（あり＝27.00、なし＝21.88）。女子においては、無理やり人から金や品物を取り上げたことのある者とない者において大きな差が見られた（あり＝28.38、なし＝22.62）。「不信」に比べ「自分への信頼」（男子３項目、女子２項目）や、「他人への信頼」（男子２項目、女子４項目）は、有意な関連が認められた問題行動は少なかった。よって、問題行動をとる高校生は強い不信感を抱いていることが示唆された。

２）親の態度と問題行動

親の態度はEICA親子関係診断検査より「情緒的支持」（５項目）、「自律性」（３項目）、「同一化」（3項目）、「統制」（３項目）を用いた。それらと、問題行動(28 項目)を行っている者といない者について平均値を比較したところ、「情緒的支持」で男子６項目、女子 12 項目で有意差が認められ、「自律性」は男子７項目、女子７項目、「同一化」では男子は関連が見られず、女子は４項目において関連が見られた。「統制」では男子３項目、女子４項目で差が見られた。なかでも、「情緒的支持」と「自律性」が問題行動と関連が強くみられ、「情緒的支持」では女子において多くの問題行動に影響を与えることが示唆された。情緒的支持は、平均値の低い方が問題行動をとる傾向が認められ、男子では無断外泊（あり＝2.07、なし＝2.64）、女子では万引き（あり＝2.22、なし＝3.02）や暴力（あり＝1.91、なし＝2.92）において差が見られた。自律性は、平均値の高い方が問題行動をとる傾向が認められ、男子では深夜徘徊（あり＝1.64、なし＝1.33）、女子ではピアスや髪を染めるなどの校則違反（あり＝1.40、なし＝1.16）において差がみられた。これは、自律性におけるしつけの甘い面が浮き彫りになった結果ではないかと思われる。

Ⅳ．結論

非行少年は不信感が強いといわれているが、一般少年も問題行動を行っている者の方が不信感が強いことが明らかとなった。また、親の態度が情緒的であると問題行動が少ないこと、自律性を尊重することは高校生という時期において必ずしも良いことではないことが明らかになった。よって、不信の緩和、及び親の態度の改善が問題行動の抑制に重要になることが示唆された。

Ⅴ．主な参考文献

天貝由美子　1999 一般高校生と非行少年の信頼感に影響を及ぼす経験要因　教育心理学研究 47, 229－238